

# 山ノ内14号墳発掘調査報告書



平成元年3月

島根県旭町教育委員会

# 山ノ内14号墳発掘調査報告書



Location of *Asahi-cho*

平成元年3月

島根県旭町教育委員会

## はじめに

本町は、昭和60年度町の活性化を目指して、木田地区内に125haの山林を開発して74haの果樹園を造成する県皆農用地開発事業が計画された。

開発協議が行なわれる中において、埋蔵文化財調査が必要であることを知り、県文化課へ二度三度と足を運んだ。これが就任早々の私の仕事始めであった。恥ずかしいことであるが、どこにどのような調査員がおられるかもわからない状態からの出発であった。

調査員には、公務のある中で無理を申し上げ、昭和62年3月より延べ8日間にわたる分布調査を実施していただいた。その調査の中において、埋蔵文化財のもつ意味、保存の大切さなどの認識をより一層深めていった、というのが本音である。

調査の結果、おびただしい古墳の数となり、現代人が生産団地として好ましいと考える土地は、既に古代人が察知していたことに大きな驚きを感じた。町執行部にも文化財の重要性を理解していただき、最小限の開発にとどめ、やむを得ない一基を残して保存する決断をしていただいた。

発掘にあたっては、本町調査員の養成も兼ねて県より主事の派遣をいただき、炎天下長期間のご苦労をかけた。

更に、現地説明会を開催していただき、住民の文化財に対する認識を新たにしていただいた。発掘されたものは、PTA並びに有志のご尽力により、地元小学校に移築され、教材として活用されることになった。うれしい限りである。

本調査実施にあたりご指導下さいました、島根大学教授田中義昭先生、並びに島根県教育委員会文化課、町文化財保護審議委員会その他関係各位のご協力ご援助を賜わりました。ここに、衷心より厚くお礼申し上げます。

平成元年3月

島根県旭町教育委員会

教育長 河野 明

## 例　　言

1. 本書は、島根県那賀郡旭町大字木田 1630—5 番地に所在する山ノ内14号墳の発掘調査 報告書である。
2. 本調査は、島根県浜田農林事務所の委託を受けて、旭町教育委員会が実施した。
3. 現地調査は、昭和63年5月16日から6月9日まで（延べ16日間）行なった。
4. 発掘調査に際しては、地元の方々をはじめ島根県農林事務所、旭町建設課から終始多大な御協力をいただいた。石材の同定にあたっては三浦清氏（島根大学教授）から御教示いただいた。記して感謝の意を表したい。
5. 横穴式石室は、旭町立木田小学校の体育館脇に移築復元した。なお、調査に関する資料（写真・実測図等）は旭町教育委員会で保管している。
6. 本書の執筆は、調査員・調査補助員・調査協力者・事務局が行ない（執筆者名は目次および各項末尾に記す）、編集は松本岩雄が行なった。

## 目 次

第1章 調査に至る経緯と経過 .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	(花田宣之) 1
2. 発掘調査組織 .....	(今田修二) 3
3. 発掘調査日誌抄 .....	(松本岩雄) 3
第2章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	(今田修二) 4
第3章 山ノ内古墳群の構成 .....	(松本岩雄) 7
第4章 山ノ内14号墳の調査 .....	(吉本徳昭) 13
1. 墳丘について .....	15
2. 内部構造 .....	16
第5章 まとめ .....	(松本岩雄) 21

## 挿 図 目 次

図1 山ノ内古墳群の位置と周辺の遺跡分布図 .....	5～6
図2 山ノ内古墳群分布図 .....	9～10
図3 山ノ内2・3・4号墳実測図 .....	11
図4 犬立古墳(1)・やつおもて10号墳(2)採集須恵器 .....	12
図5 山ノ内14号墳調査前地形図 .....	13
図6 山ノ内14号墳調査区配図 .....	14
図7 山ノ内14号墳土層断面図 .....	15
図8 山ノ内14号墳石室平面図 .....	16
図9 山ノ内14号墳石室の天井石(1・2)と奥壁石(3) .....	16
図10 山ノ内14号墳石室実測図 .....	17～18
図11 山ノ内14号墳調査後地形図 .....	19

## 図版目次

- |       |                       |        |                  |
|-------|-----------------------|--------|------------------|
| 図版1   | 山ノ内14号墳及び周辺地形の鳥瞰      | 図版9-1  | 横穴式石室全景（西から）     |
| 図版2-1 | 山ノ内古墳群遠景              | -2     | 横穴式石室全景（東から）     |
| -2    | 山ノ内14号墳の遠望            | 図版10-1 | 西側の側壁残存状況        |
| 図版3-1 | 山ノ内14号墳調査前の状況         | -2     | 東側の側壁基底部の状況      |
| -2    | 山ノ内14号墳窓掘坑の状況         | 図版11-1 | 横穴式石室全景（南から）     |
| 図版4-1 | 谷部に転落した石室石材           | -2     | 横穴式石室全景（北から）     |
| -2    | 発掘調査風景                | 図版12-1 | 横穴式石室基底部の状況（西から） |
| 図版5-1 | 横穴式石室内の土層（南から）        | -2     | 横穴式石室基底部の状況（北から） |
| -2    | 横穴式石室内の土層（東から）        | 図版13-1 | 石室石材除去後の状況（南から）  |
| 図版6-1 | 横穴式石室内の奥壁・側壁転落状況（南から） | -2     | 横穴式石室掘り形全景（南から）  |
| -2    | 横穴式石室内の奥壁・側壁転落状況（北から） | 図版14-1 | 石室の西側に設置したトレンチ   |
| 図版7-1 | 横穴式石室掘り形調査状況（南から）     | -2     | 石室の東側に設置したトレンチ   |
| -2    | 横穴式石室掘り形の土層（北から）      | 図版15-1 | 山ノ内14号墳発掘前の状況    |
| 図版8-1 | 横穴式石室掘り形の上層（南西から）     | -2     | 山ノ内14号墳発掘後の状況    |
| -2    | 横穴式石室掘り形の土層（南西から）     | 図版16-1 | 石室奥壁と天井石         |
|       |                       | -2     | 犬立古墳採集須恵器        |
|       |                       | -3     | やつおもて10号墳出土須恵器   |

## 第1章 調査に至る経緯と経過

### 1. 調査に至る経緯

本調査は、那賀郡旭町大字山ノ内地区に開発を計画された県営農地開発事業（梨園造成）に関連し受託事業として、旭町教育委員会が発掘調査を行ったものである。

この事業は、島根県（浜田農林事務所）を事業主体及び旭町を関係主体として、事業規模 118ha・造成面積 76.8ha、事業費 23 億円、事業期間 60 年度より 10 ヶ年継続事業という大規模な事業計画で本町の活性化の一貫として導入されたものである。

しかしながら、この開発区域内にはすでに、犬立古墳、柏尾原火塚、坂本奥 1・2 号墳の 4 基の古墳が概に周知されており、事業主体側よりこの遺跡の取扱について協議がなされたが、周知の古墳の発掘調査を前提とした、原因者負担の問題に終始したにとどまり、事の重大性が理解されていなかった。

その後、協議は双方の事情により一時中断状態となり、この事が後に大きな影響を及ぼす事となつた。

当教育委員会が、協議を受けまず実施しなければならない事は、問題となる開発区域内の分布調査を早急に実施し、遺跡の範囲を明確にする事であるが、残念ながら当教育委員会には、専門員がおらず、またこのように大規模な区域内を一定期間調査する事の出来る調査員は近隣に見当らず、分布調査は延々となり一方においては、開発計画は当初予定どおり進められて行った。

当教育委員会では、何とか調査を実施すべく県文化財保護指導員の的場幸雄氏にご無理をお願いして分布予備調査を実施するに至つた。

予備調査は昭和 62 年 3 月 29 日に実施し、その結果区域内外に新たに 14 基の古墳を確認した事により、今後更に遺跡の範囲が拡大する可能性が考えられた。そこでこの調査結果を基に県教育委員会に報告し今後の対応を協議する中で、ご無理を承知で調査員の派遣をお願いいただき本格的な分布調査が早急に実施される事になった。

本格的な分布調査は昭和 62 年 4 月から 7 月にかけて、延 7 日間をもって実施し最終的に工区内に 24 基、工区外に 14 基の計 38 基の古墳に、要試掘調査箇所 8 箇所を確認し、これらの古墳を総称して、山ノ内古墳群（仮称）とした。

以後、この調査結果を踏まえ県教育委員会、町教育委員会、事業主体、関係主体とにより再三にわたりこの遺跡の取扱について協議がなされた。

当教育委員会としては、この様な大規模な古墳群が判明した以上あくまでも現状保存の姿勢にもとづき、文化財保護の意義を訴えつつ開発計画の変更をお願いしたが、協議はその後も平行線をたどった。

そうした中で、事業実施を日前に控え開発側よりやむなく計画変更案の提示がなされた。

その内容は、施工区域内の造成条件により14号墳は、計画上どうしてもはずす事が出来ないが、その他の古墳については全て開発計画より除外し事業を進めるとの報告を受けた。

この報告に基づき、以後の協議は14号墳発掘調査実施に移行され、実施条件に困難性を伴ったが県教育委員会のご指導とご協力により、当教育委員会が調査主体となり発掘調査を実施するに至った。

調査は、昭和63年5月16日～6月9日まで（延べ16日間）行なった。

この開発事業は、木町の農林業の振興にとって大きな期待と役割をになうものであり、この遺跡についての取扱について協議したが、事業主体である島根県（浜田農林事務所）においては、山ノ内14号墳をのぞいて全ての古墳を開発区域より除外されるなど、文化財保護行政への協力も大なるものがある事等に鑑み、貴重な例とはいえる記録保存はやむなく、該地での開発はやむをえないとの見解に至った。

発掘された横穴式石室の基底部は、丘陵下にある木田小学校に移築復元し、歴史教材としてばかりなく広く一般市民の方に文化財保護への理解を求める資料として、活用して行きたい。

#### ◆分布調査経過

1回目 昭和62年3月29日（日）I工区分布予備調査（踏査）

派遣調査員 浜田二中 的場幸雄

補助員 7名

踏査の結果 14基の古墳を確認した

2回目 昭和62年4月21～22日（2日間）I工区分布本調査（踏査）

3/29調査古墳の確認及び本調査に入る

派遣調査員 島根県教育庁文化課 松本岩雄

補助員 7名

（古墳番号坑の打ち込み、正確な位置確認、調査表・図面の作成）

踏査の結果 新たに、7基の古墳を確認した

3回目 昭和62年4月27日（日）分布本調査（踏査）主に北側

派遣調査員 島根県教育庁文化課 松本岩雄

補助員 8名

踏査の結果 5基の古墳を追加確認した

\*ここまで調査でI工区を終了した

4回目 昭和62年7月1日～4日（4日間）II工区分布本調査（踏査）

派遣調査員 島根県教育庁文化課 松本岩雄

補助員 延33人

踏査の結果 12基の古墳と疑わしき所を8箇所確認した

\*II工区調査終了

#### ◆立木除去後における再分布調査

1回目 昭和62年10月2日 昭和62年度事業（5.8ha）I工区（踏査）

派遣調査員 浜田二中 的場幸雄

補助員 3名

踏査の結果 墓碑文化財らしきものは確認されなかった

2回目 昭和63年5月28日 昭和63年度事業予定期（I工区）の踏査

派遣調査員 島根文化財保護指導委員 宮本徳明

補助員 2名

踏査の結果 墓碑文化財と考えられるものは確認されなかった

（花田宣之）

## 2. 発掘調査組織

調査指導者 田中義昭（島根大学教授）

調査員 松木岩雄（島根県教育庁文化課文化財保護主事）

調査補助員 花田宜之・今田修二

調査協力者 宮本徳昭（島根県文化財保護指導委員）

事務局 河野明・大田房男・藤本孝男・佐々木勝二・岩倉純子

調査参加者 大津勇夫・藤本峰夫・小川勉・福田武夫・藤本陸夫（町文化財保護委員）

旭町文化財保護委員 新井卯市・宮本均・新崎八四郎・佐伯充男

資料整理・協力者 新海正博・木瀬高宏・瀬田明子・山根由利子・林健亮

（今田修二）

## 3. 発掘調査日誌抄

### ◆昭和63年5月16日（月）快晴

調査前の写真撮影。丘陵頂部から地形測量を開始。基準杭設置作業。佐伯充男氏（町文化財保護審議委員）来訪。

### ◆5月17日（火）晴

5月というのに夏のような暑さ。慰靈祭をとり行う。昨日に引き続き地形測量。基準杭設置作業。発掘区を設定し、廻植土除去作業に着手。佐伯充男氏来訪。

### ◆5月18日（水）晴

地形測量を終了。表土除去作業。

### ◆5月19日（木）晴

地形測量は終了。盃形坑内を中心に掘り進め、小石が一部露出。谷部の調査開始。河野明教育長、宮沢明久県文化課総務文化財第一係長来訪。

### ◆5月20日（金）くもりのち雨

盃形坑内の調査を進める。原位置を留めていると思われる石を5個確認。横穴式石室と思われるが本

日は確認できず。午後、雨が強くなったため作業中止。

### ◆5月21日（土）くもり一時小雨

横穴式石室の側壁と思われる石列を確認。2段目くらいまでは比較的良好な状態で遺存していることが判明。床面は本日確認できず。石室内土層写真撮影。

### ◆5月23日（月）雨のちくもり

石室内土層図作成。石室内土層写真撮影。

### ◆5月24日（火）晴のち晴

石室の床部を精査したが、明確な床面は検出できず。石室の北側で地山検出作業を進めたが墳丘を画するような加工痕は確認できなかった。新井卯市氏（町文化財保護審議委員）来訪。

### ◆5月25日（水）晴

石室掘り形検出作業開始。佐伯充男氏来訪。

### ◆5月26日（木）晴

石室掘り形検出作業を継続。石室の東西にトレン



石室実測風景



現地説明会のようす



石室解体作業

- チを入れ墳砲の確認を試みたが検出できず。
- ◆5月28日（土）晴  
石室内土層図作成。写真撮影。セクションベルト取りはずし。測定地北西丘陵の分布調査。
- ◆5月30日（月）曇時々晴  
土層の写真撮影・実測図作成。セクションベルト取りはずし。石室内に倒れ込んだ奥壁を除去。
- ◆5月31日（火）曇時々晴  
石室内を滑掃し、写真撮影。石室掘り形模作業。掘り形下半部は明瞭であったが、上半はやや不明瞭、掘り方の土層写真撮影、断面図作成。セクションベルトを除去し、石室掘り形をほぼ完結。
- ◆6月1日（水）雨  
石室実測用の基準線を設置。
- ◆6月3日（金）雨  
雨のため現場作業は中止。写真整理。現地説明会資料作成。案内板作成。
- ◆6月4日（土）晴  
現地説明会。町民約35名、木田小学校（児童35名、先生5名）、都川小学校（児童12名、先生2名）の参加あり。石室平面図作成。遠景写真撮影。
- ◆6月5日（日）晴



木田小学校に移築復元した山ノ内14号墳

- 石室平面図・断面図作成。丘陵頂部発掘区の測量。日曜日のため、町民約16名の見学者あり。
- ◆6月6日（月）晴  
遺構全体の写真撮影。調査指導会開催（田中義昭島根大学教授、町文化財保護審議委員）。墳丘断ち割り調査、石室解体作業開始。
- ◆6月7日（火）晴  
石室基底部の石、写真撮影。石室解体作業。石材は壇面で見えていたところより埋れている部分が多く、人力での運搬はかなり難航する。掘り形基底部の発堀。藤本孝男係長米塼。打ち上げ。
- ◆6月8日（水）くもり時々雨  
石室掘り形写真撮影・平面図作成。断ち割り部の土層図作成。奥壁・天井石と推定される石の実測。石室石材のサンプリング。佐々木勝二氏、岩倉純子氏来援。
- ◆6月9日（木）雨のち曇  
器材撤去。石室調査地の写真撮影・実測図作成。山ノ内古墳周辺で石材資料を採取。現地調査終了。
- ◆平成元年3月26日（日）晴  
木田小学校の体育館前に石室を移築復元する。

（松本岩雄）

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

旭町は、島根県のほぼ中央の浜田市より南西に25km、広島県々境に位置する。山ノ内14号墳は、那賀郡旭町大字木田・山ノ内地区1630-5番地に所在し、北側約1kmで邑智郡桜江町に隣接する。標高約290mあまりの当地域としては緩やかな丘陵地帯であり、この丘陵の南側は比較的広い水田地帯（標高約250m）が広がっており、江川の支流である木田川が北西方向に流れている。また、丘陵の北側（大字山ノ内）は狭小な谷水田が点在する。この地域の史跡として社寺の歴史上からも名高

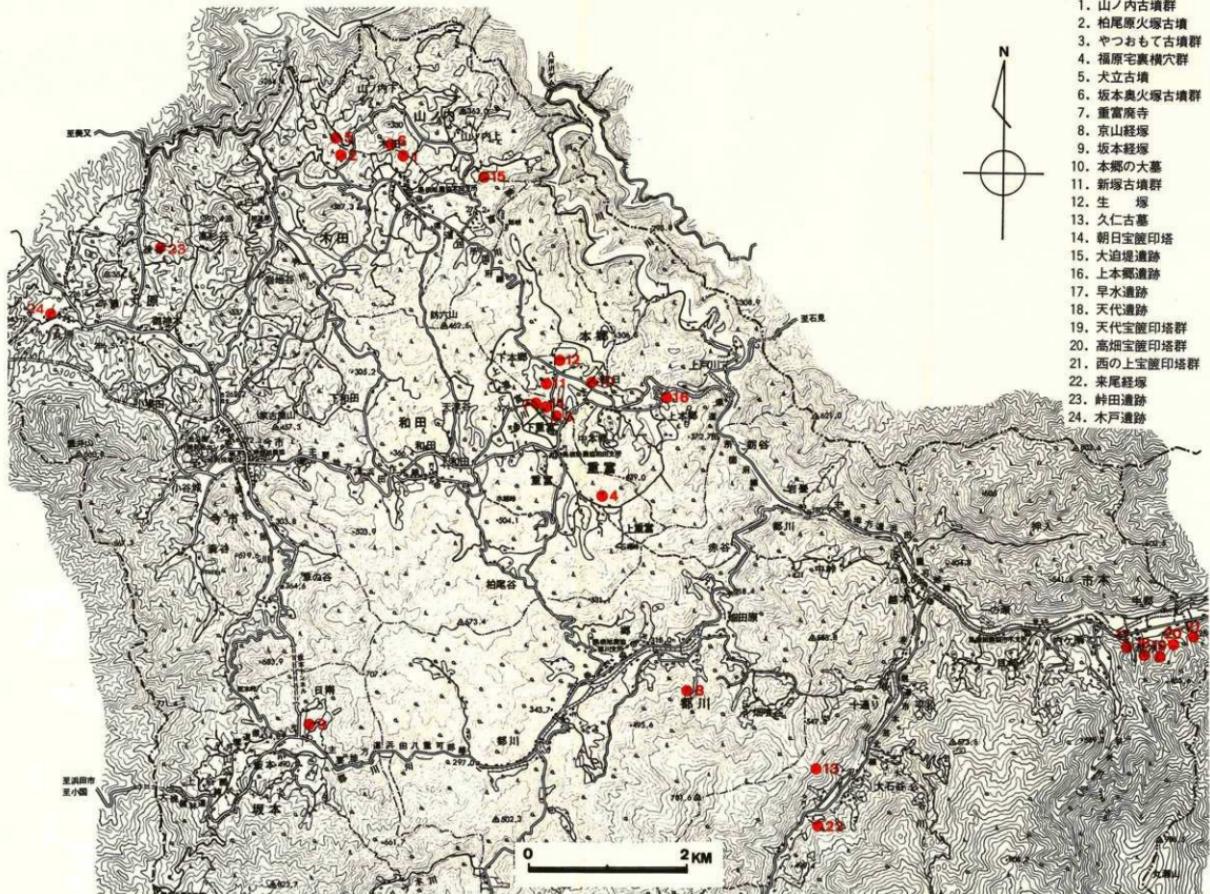


図1 山ノ内古墳群の位置と周辺の遺跡分布図

1. 山ノ内古墳群
2. 柏尾原火塚古墳
3. やつおもて古墳群
4. 福原宅裏横穴群
5. 大立古墳
6. 坂本奥火塚古墳群
7. 重富廃寺
8. 京山経塚
9. 坂本経塚
10. 本郷の大墓
11. 新塚古墳群
12. 生塚
13. 久仁古墓
14. 朝日宝篋印塔
15. 大迫堤遺跡
16. 上本郷遺跡
17. 早水遺跡
18. 天代遺跡
19. 天代宝篋印塔群
20. 高畑宝篋印塔群
21. 西の上宝篋印塔群
22. 来尾経塚
23. 舟田遺跡
24. 木戸遺跡

い正蓮寺山門がある。和田（大字和田）の工匠として後世に名を残し、明治18年に没した豊原喜一郎が建立したもので、喜一郎傑作の石見三門のひとつである。山門の龍・獅子・鶴の彫刻は特に有名である。

当初この地域の古墳としては、犬立古墳、坂本奥1号・2号墳、柏尾原古墳の4基が周知されていたが、県営農地開発事業（梨園造成）の開発計画に伴い、町としては初めての大がかりな分布調査を行ったところ、新たに27基の古墳が発見され、この地域には既周知の古墳とあわせ総数31基の古墳群が存在することが明らかになった。そしてこの古墳群については、事業対象地にあたる丘陵の尾根が「木田」と「山ノ内」の字境になっているため山ノ内1号墳～27号墳と称することにした。

それぞれ規模は径5～17m程度の円墳であり、調査した14号墳をはじめとして、ほとんどの古墳について盜掘の痕跡があり、未盜掘のまま存在するものは7～8基程度にすぎない。

町内においてこのような古墳群としては、著名な重富の「やつおもて古墳群」がある。このやつおもて古墳群は、山ノ内地区より、さらに南東へ約5kmのところに通称下重富といわれる人家集落の裏山の松山中に点在しており、約20基から構成されて、前方後円墳1基も確認されている。この山麓を重富川が流れ、川ぞいに清堂寺、善正寺の寺名があり、その寺地と伝えられる場所と古墳群がある位置とのほぼ中間にあたる水田中から古代瓦及び土器の破片が出土している。これらのことから、当時農業生産力が高まり、階層分化が進み、共同体中で経済的にも優位に立つ首長クラスの豪族によって、古代の寺院跡（重富庵寺と仮称）が建立されたものと考えられ、この地域は極めて重要な地域であったことが窺われる。

このたび調査した山ノ内古墳群は、石見地区においては、やつおもて古墳群に匹敵する有数の古墳群といえ、当地域の歴史を解明するうえで重要な意味をもっている。

（今田修二）

### 第3章 山ノ内古墳群の構成

那賀郡旭町大字木田から大字山ノ内にかけての丘陵には現在31基の古墳が確認されている。遺跡の名称は、周知の遺跡であった坂本奥1号・2号墳、柏尾原古墳、犬立古墳についてはそのまま用いることとし、昭和62年に実施した分布調査によって新たに発見された古墳については丘陵の尾根がちょうど「大字木田」と「大字山ノ内」の字境になっているため、便宜的に山ノ内1号墳・2号墳・3号墳……と称することにした。そして、これらの古墳すべてを山ノ内古墳群と総称することにした。

表1. 山ノ内古墳群計測値表

番号	墳形	規 模 (m)				備考	番号	墳形	規 模 (m)				備考	
		径・一边	高さ	溝	幅				径・一边	高さ	溝	幅	溝 深さ	
山ノ内 1号墳	円?	径 7.3				盜掘坑・石	山ノ内 17号墳	?	6.8×7.2	上3.1下0.8	0.8	盜掘坑・石		
タ 2	円	9.5×9.0	0.9	上4.0下2.5	0.4		タ 18	円	11.2×8.3	1.6	上3.9下1.3	0.8	盜掘坑・石	
タ 3	円	8.0×8.0	0.9				タ 19	円	17.2×16.2	1.5				
タ 4	円	8.5×10.0	0.6			盜掘坑・石	タ 20	円?	13.9×13.2	1.1				
タ 5	円	10.0×10.5	0.8			盜掘坑・石	タ 21	円	9.0×10.5	0.8	上1.3	0.4		
タ 6	円	10.7×10.2	1.2				タ 22	円	5.8×6.2	0.7				
タ 7	円	8.1×10.4	0.3			盜掘坑・石	タ 23	円	6.5×8.3	0.6	上5.0下1.5	0.8	盜掘坑・石	
タ 8	円	7.0×6.8	0.4			盜掘坑・石	タ 24	円	7.7×7.7	0.7			盜掘坑・石	
タ 9	円	6.2×6.8	0.4				タ 25	円	7.4×7.6	1.7			盜掘坑・石	
タ 10	円	8.0×8.2	0.8	上2.0下1.0	0.4	盜掘坑・石	タ 26	?	不明				盜掘坑・石	
タ 11	円	8.5×9.0	1.3	上4.5下1.2	1.1	盜掘坑	タ 27	円	5.0×5.1	0.5	上1.8下0.8			
タ 12	円	9.0×9.3	0.8			石	坂本奥 1号墳	円	11.3×10.2	3.2	上4.7下1.4	1.6	盜掘坑・石	図2-C
タ 13	円	9.0×9.0	0.4				タ 2	円	10.3×7.5	2.0	上5.0	2.0	盜掘坑・石	図2-B
タ 14	円?	径 7.0				横穴式石室	柏尾原 古墳	円	6.0×6.3	1.1	上3.8下1.0	1.3	横穴式石室	図2-B
タ 15	?	不明				盜掘坑・石	犬立古 墳	円	8.0×9.0	1.1	上4.5下0.7	1.2	横穴式石室	図2-A
タ 16	円	8.2×7.5	0.7	上4.5下1.6	1.2	盜掘坑								

分布調査は、樹木が多数繁茂している悪条件のもとで実施したため、遺漏もあろうかと思われるが、現在までに31基の古墳を確認している(表1、図2)。以下その概要を記しておくことにする。

これらの古墳は標高250～300mの丘陵頂部から丘陵斜面にかけて分布している。周辺の水田からの比高は30～60mである。封土が流失したり、盗掘を受けたため不明なものもあるが、多くは直径10m前後、高さ1mあまりの円墳と考えられる。これらは石材の露出状況などから横穴式石室が多いものと推測される。立地として丘陵頂部あるいは尾根上に位置する古墳は20基ある。山ノ内1・2・3・4・6・7・8・9・10・11・12・13・19・20・21・22・23・24・25・27号墳などである。このうち墳丘を画する溝の痕跡を確認できるものは2・10・11・21・23・27号墳の6基である。丘陵斜面に築造されているのは、山ノ内5・14・15・16・17・18・26号墳、坂本奥1・2号墳、柏尾原古墳、犬立古墳の11基である。このうち山ノ内16・17・18号墳、坂本奥1・2号墳、柏尾原古墳、犬立古墳は山側に顯著なカット面と溝の痕跡が認められる。

これまでに確認している31基の古墳は分布状況からおおまかに6つのグループに分けることが可能である。ここでは便宜上東側に位置するグループから順次A・B・C……Fと仮称しておくことにする。

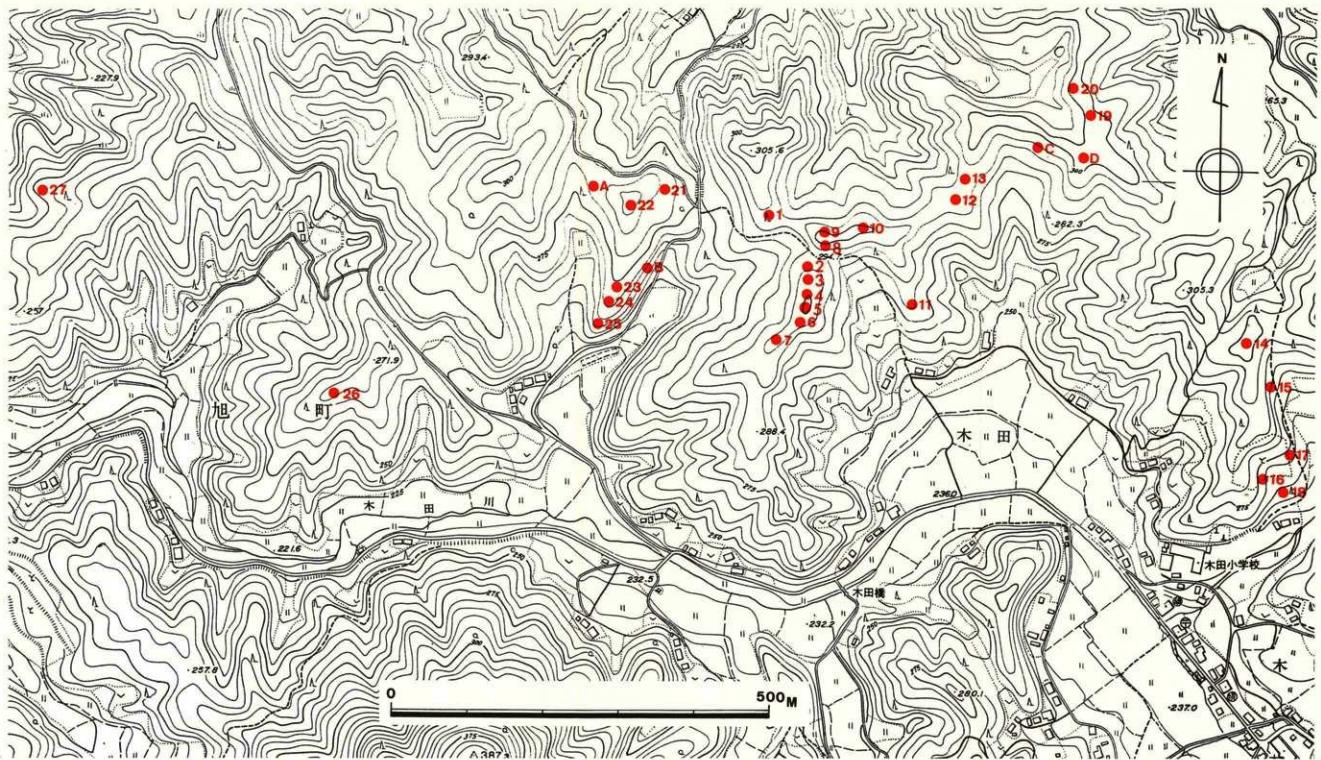


図2 山ノ内古墳群分布図 (1:5,000)

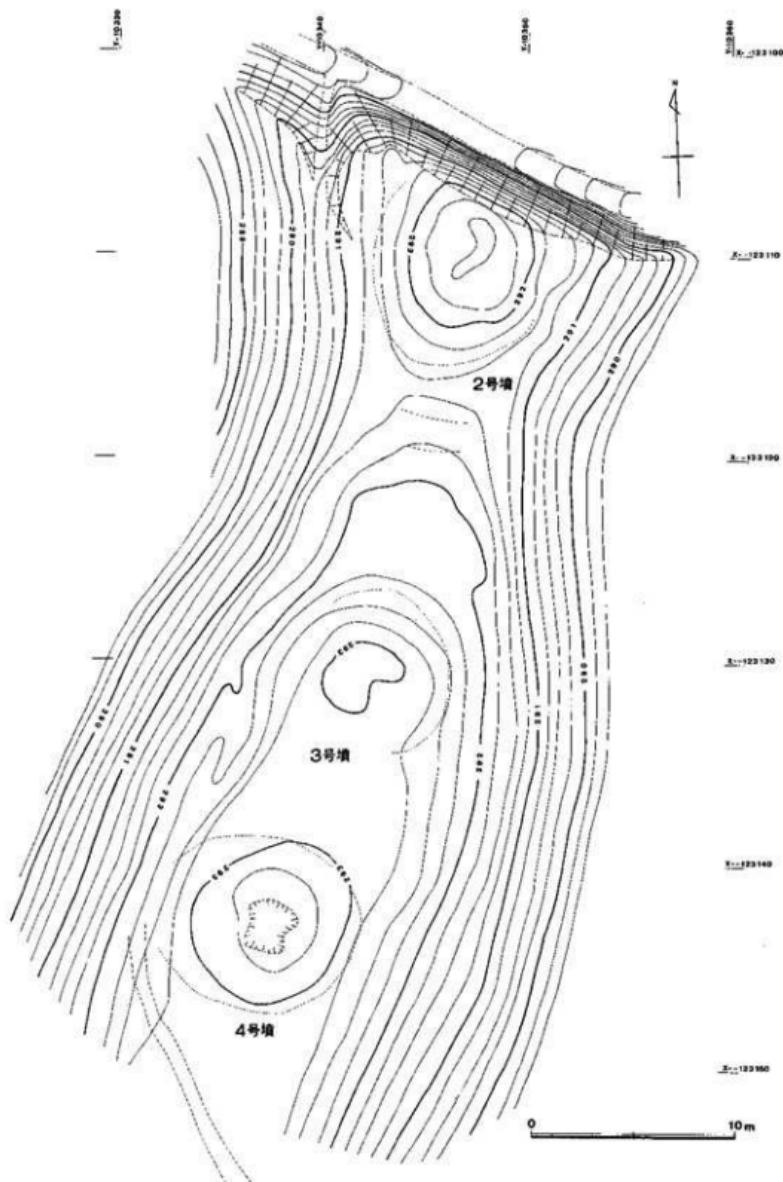


図3 山ノ内2・3・4号墳実測図

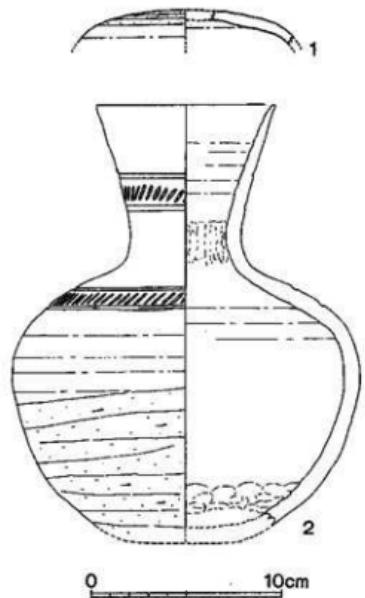


図4 犬立古墳(1)・やつおもて古墳(2)採集須恵器 11号墳はやや離れてそれぞれ単独で分布している。5号墳以外はいずれも丘陵の頂部や尾根上に位置している。C群は山ノ内古墳群中最も多く存在し、墳丘の遺存状態も比較的良好なものが多い。

D群 山ノ内21・22・23・24・25号墳、犬立古墳、柏尾原古墳の7基からなる。山ノ内21～25号墳が丘陵頂部や尾根上に位置するのに対し、犬立古墳・柏尾原古墳は丘陵斜面に位置する。犬立古墳は丘陵南西斜面に位置する円墳で、 $8.0 \times 9.0 m$ 、高さ1.1mある。墳頂部に $3.6 \times 3.2 m$ 、深さ0.8mの盗掘坑があり、周辺に多くの石材が散乱していることから横穴式石室と思われる。盗掘坑内で須恵器片1点を採集している(図4-1)。蓋坏蓋と思われる小片で、天井部に回転ヘラケズリが施されており、山陰須恵器編年Ⅱ期に属するものと思われる。柏尾原古墳は、 $6.0 \times 6.3 m$ 、高さ1.1mの円墳で、横穴式石室の天井石と思われる大きな石材が露出している。

E群 山ノ内26号墳の1基のみである。丘陵斜面に位置し、盗掘坑内に若干の石材が認められるが、墳形・墳丘規模等についてはまったく不明である。

F群 山ノ内27号墳の1基のみである。丘陵の尾根上に位置する円墳である。 $5.0 \times 5.1 m$ 、高さ0.5mの小規模な古墳である。

A群 山ノ内14・15・16・17・18号墳の5基である。16・17・18号墳は丘陵麓近くの緩やかな斜面に比較的接近した状態で分布している。14・15号墳はいずれも丘陵斜面に位置するが、それぞれ単独で分布している。

B群 山ノ内12・13・19・20号墳、坂本奥1・2号墳の6基からなる。山ノ内古墳群中最も高いところに位置し、やや分散した状態で分布している。山ノ内12・13・19・20号墳が丘陵頂部や丘陵尾根上に位置するのに対し、坂本奥1・2号墳は丘陵の急斜面に位置し、山側に顕著なカット面と溝を有する。なお、山ノ内19号墳は径 $17.2 \times 16.2 m$ 、高さ1.5mを有する円墳で、山ノ内古墳群中では最も大きい。

C群 山ノ内1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11号墳の11基からなる。山ノ内2～9号墳は接近して分布しているが、1・10・

(松本岩雄)

## 第4章 山ノ内14号墳の調査

今回調査対象となった山ノ内14号墳は、本古墳群の東端の群（A群）の最北端（丘陵頂上部付近）に位置する。分布調査の結果、丘陵斜面に  $2 \times 2.5m$  あまりの盗掘坑らしき穴と、そのすぐ南に石だまりがあり、さらに下方の谷部に2個の大きな石が転落していたことから横穴式石室を有する古墳と推測された（図5、図版3、図版4-1）。

発掘調査の結果、丘陵頂上部（標高297m）から約2.5m下がった南西の急斜面に主体部を築いた古墳であることが判明した。盛土は失われ、墳丘規模をわずかに推定できる程度であり、横穴式石

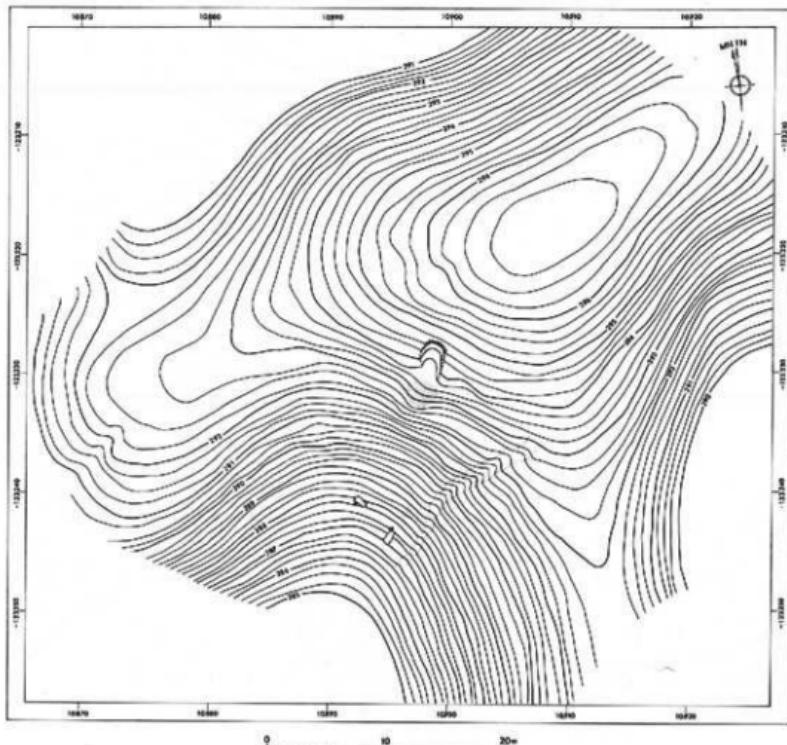


図5 山ノ内14号墳調査前地形図（アミ目は小石の散布）

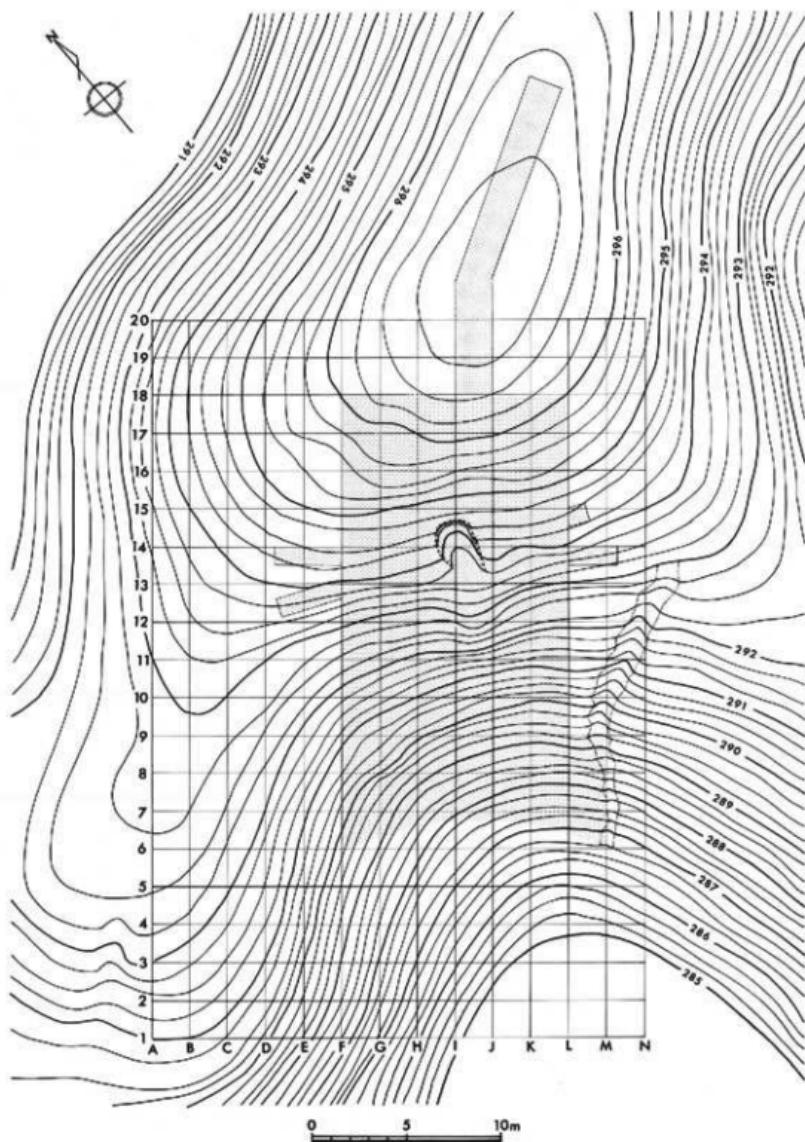


図6 山ノ内14号墳調査区配置図（アミ目は発掘範囲）

室の下部が残存していたものの遺物は検出されなかった。以下、墳丘と内部構造について順次述べていくこととする。

### 1. 墳丘について

表面調査並びに地形測量の段階では、盛土がほとんど失われており、墳丘を画するような痕跡も確認されなかつたため、現状における墳形・規模等については把握できなかつた。

発掘調査の結果、主体部周辺とさらにその外側とを比較検討したとき、明瞭な盛土は検出されず、急斜面（約20～30度）のため既に流失したものと判断された。

調査最終段階の断割り調査によって、主体部掘り形の北側（丘陵頂上側）において地山（赤褐色土）をわずかばかり加工したと思われる平坦面を確認した（図7）。また、主体部の東側では石室主軸から約3.0mのところに不明瞭であるが落ち込み状の上層（暗赤褐色土）を確認した。主体部の西側でも石室主軸から4mあまりのところで落ち込み状を呈する暗赤褐色土を検出した（図7、図版14）。こうした落ち込み状の上層を仮に墳丘を限る遺構と考えれば、東西7m前後の墳丘規模

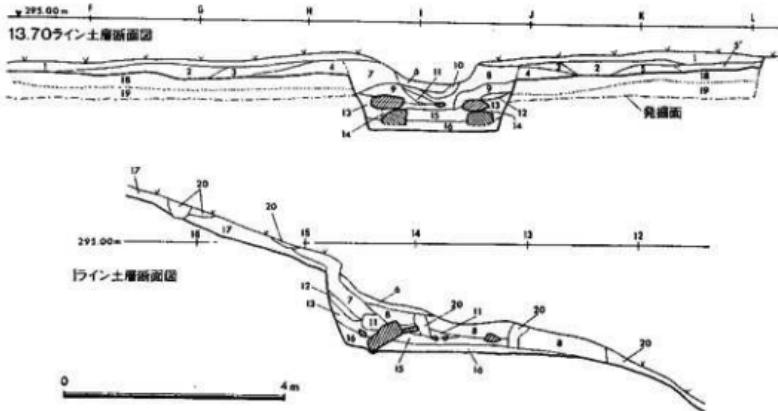


図7 山ノ内14号墳土層断面図

1. 灰土
2. 暗赤褐色土
3. 赤褐色土
4. 暗赤褐色土
5. 明赤褐色土
- 5'. やや黄色味をおびた明赤褐色土
6. 黒褐色土
7. 茶褐色土
8. 暗茶褐色土
9. 赤色土
10. 明茶褐色土
11. 粘質明茶色土
12. 黄色土
13. 赤色土
14. 粘質明茶色土
15. 明赤褐色土
16. 明茶褐色土
17. 黄赤褐色土
18. 暗黄色土（地山と考えられる）
19. 黄褐色土（粘性なし、明確な地山）
20. 摂乱

であったと推定できよう(図11)。

## 2. 内部構造

南に開口する横穴式石室である。天井石は全て失われ、側壁も大半は破壊されていたが、基底部の石が残存しており、石室の規模・形態等について大略を把握することができた。それによると無袖型の石室で、奥壁部幅1.0m、羨道部幅0.7m、残存長3.3mを測る。石室主軸方向はN-23°-Eを示す。石室の平面プランは整った長方形を呈しているが、西壁残存部最南端の腰石中央部から南側がやや中央に出ている点や床面で直方体の石が主軸に交わるような状態で検出された点、さらに東壁の最南端から3番目の腰石中央部が挿入状になっている点から考え、玄室は長さ2.1m、幅1.0~0.9mと推定される。したがって羨道部は幅が若干狭まり、長さは1.2m以上と考えられる。このように見た場合、玄室と推定した部分の腰石の高さはほぼ同一にしているのに対して、羨道部と推定したところは一段低くしておらずすき間もめだつ。

奥壁は基本的には比較的大きな石を2枚並べて構築していたものと思われる。奥壁西側の石は亀裂を生じていたが下半はほぼ原

位置に残存していた。この石は幅60cm、厚さ20cmあまりのものであるが高さについては不明。奥壁東側の石は、石室内に倒れ込んだ状態で検出された。大きさは、幅60cm、高さ75cm、厚さ35cmあまりを測り、角ばった自然石である。この2個の石の出土位置からすると側壁と奥壁の組み合せは、

西側では奥壁の石が外に出るよう、東側では奥壁の石が側壁の内側に入り込むようにつくられたことが知られる。奥壁の石の高さは75cmであるが、少なくとも15cmは床面に埋め込まれていたものと考えられることから、この石の上にはさら

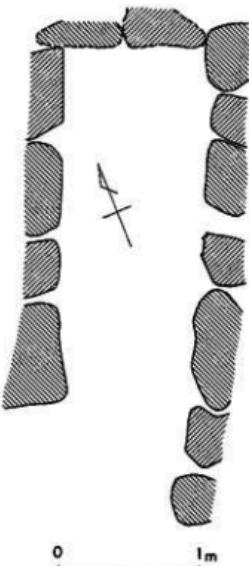


図8 山ノ内14号墳石室平面図  
(奥壁は推定復元)

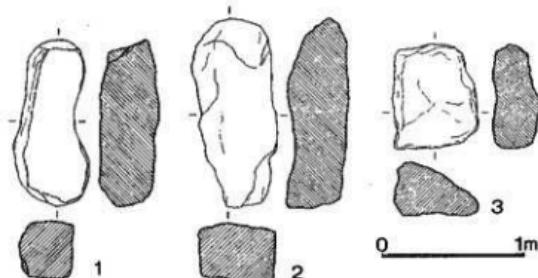


図9 山ノ内14号墳石室の天井石(1・2)と奥壁石(3)

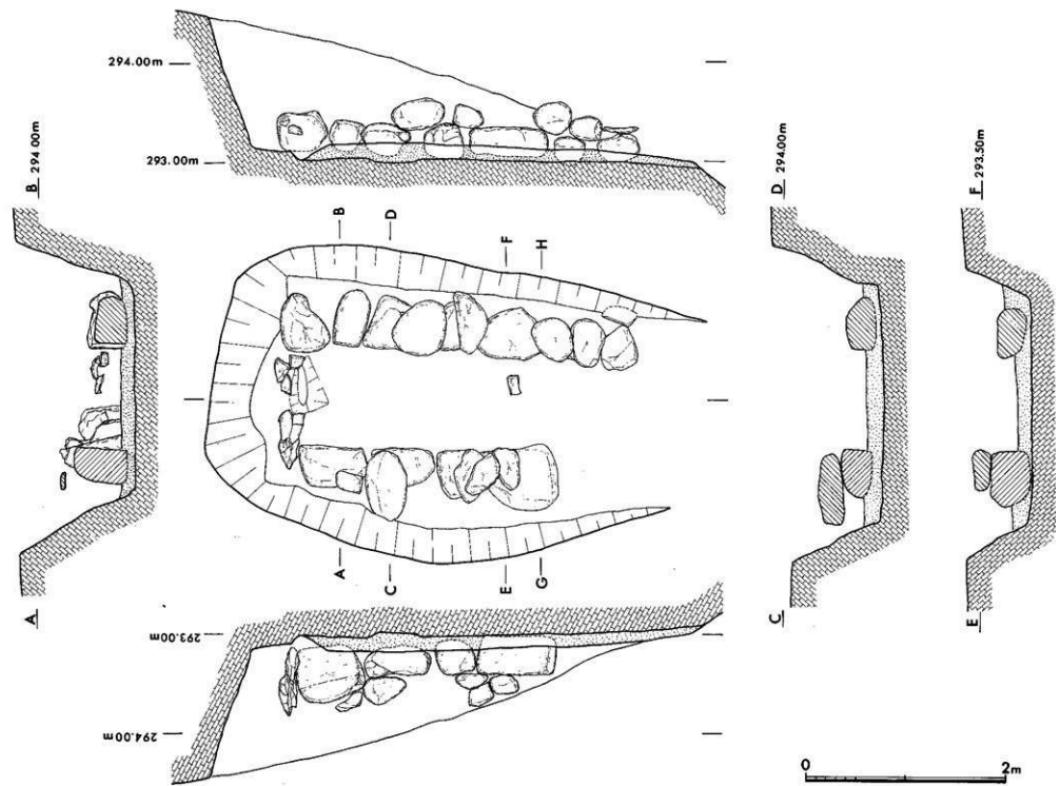


図10 山ノ内14号墳石室実測図

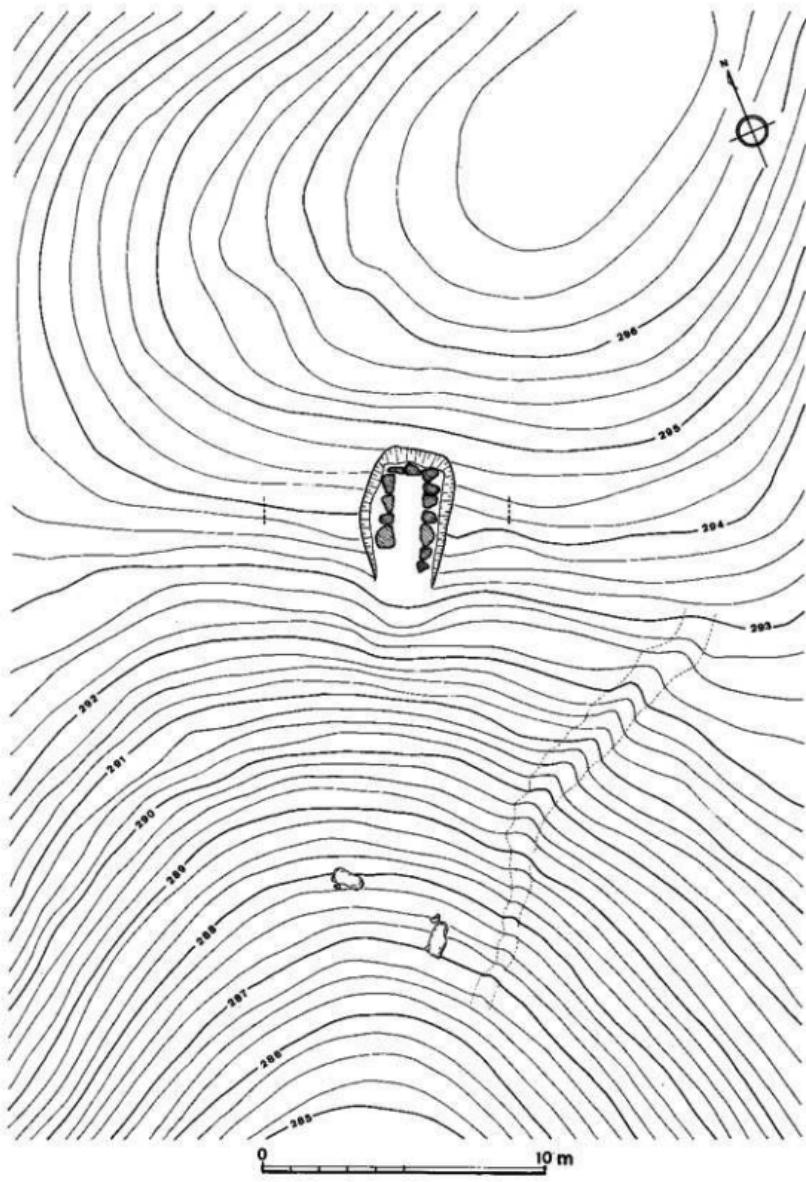


図11 山ノ内14号墳調査後地形図

にいくつかの石が積み上げられていたものと推測され、石室の高さは1m近くまではあったものと想像される。

側壁は丸味のある自然石を用いている。基底部には比較的大きな石（最大のもので約500kg）を使用し、広い面を壁面として利用しているが、2段目以上は精巧形の石材を使用する場合、石の狭い面を石室壁面とし、石室構築にあたって強度をより強くするよう配慮されている。したがって、残存部分においては控え積みといった石は部分的にしか認められなかった。西側の側壁は残存長2.5mで、一部は3段目まで遺存していた。奥壁に接する腰石は、腰面にあたる部分を打ち削っている。部分的にしか遺存していないので不明確であるが、いわゆるレンガ積みの手法をとっている。東側の側壁は、2段目まで遺存しており、残存長は約3.3mを測る。西側壁よりやや小さめの石を用いているが、積み方はやはりレンガ積みとみてよい。両側壁とも垂直に近く積み上げられているが、わずかに内傾している。石の間や積みかさねの間は、粘質のある明茶色土をよく締めて目張りをしている。

床面には礫等が敷かれた痕跡は認められなかった。地山の上に比較的均質な明茶褐色土が厚さ10cmあまり認められた。

天井石と推定される石は、石室の真下の斜面に転落していたもので、直方体をしており、石室に丸木をわたすようにして構築されていたものと考えられる。石材の大きさは、図10-1が長さ120cm、幅40cm、厚さ40cm、図10-2が長さ130cm、幅50cm、厚さ40cmである。

石材は、表面観察で2種に大別でき、奥壁・天井石と考えられるものがやや角のあるごつごつした表面のもの、側壁の石が丸味があり表面も滑らかなものである。

掘り形は、遺構検出面のプランが馬蹄形を呈すが、基底部では長方形プランとなっている。遺構検出面での規模は、長さ4.9m、幅3.0m、深さ1.3mを測る。掘り形と石室石材との間は黄土色と赤色土が詰められていた。

(宮本徳昭)

## 第5章 まとめ

山ノ内14号墳は、すでに大半が破壊されていたが、調査の結果小規模な横穴式石室を埋葬施設とするものであることが判明した。墳丘規模・形態等については不明確であるが、土層断面で認めたかすかな落ち込み状のものを周溝の一部とみれば、径7mあまりの円墳であった可能性がある。

横穴式石室は、奥壁部幅1.0m、残存長3.3mの小規模な無袖型のものである。石室に使用された石材は、石英安山岩、溶結凝灰岩、風化花崗閃綠岩、石英長石斑岩の4種がある。

奥壁と天井石には石英安山岩、側壁には溶結凝灰岩、風化花崗閃綠岩、石英長石斑岩が使用されている。これらの石材は比較的近隣の地から調達されたものと考えられる。すなわち、山ノ内14号墳の東側の谷部に露出していた岩石をアトランダムに採取したところ、溶結凝灰岩、花崗閃綠岩、石英長石斑岩などが認められた。採取資料のなかには石英安山岩は含まれていなかったが、この種の岩石は旭町坂本周辺には多くみられるということである<sup>(1)</sup>。

山ノ内古墳群は、30基以上から構成された古墳群で、直径10m前後のものが近接して築造されているものが多い。14号墳は本古墳群の東端の群（A群）に含まれるが、隣接地には他の古墳がみられず単独的な在り方を示している。

旭町内では、ほかに「やつおもて古墳群<sup>(1)</sup>」（旭町重富）と称される著名な古墳群がある。この古墳群は約20基から構成されており、前方後円墳1基（10号墳）も確認されている。このうち9号墳は、幅1.6m、残存長5.6mの無袖式の横穴式石室を有するものである。石室規模は山ノ内14号墳より大きいが、奥壁下部に2枚の大きな石を置くことや、側壁の積み方などに類似点を認めることができる。また、かつて9号墳から出土したとされる須恵器はいずれも山陰須恵器編年<sup>(2)</sup>ではIV期に該当するものであり、山ノ内14号墳の築造年代を考える上で示唆に富むものといえる。10号墳は全長約16mの前方後円墳で、石材の露出状況からみると横穴式石室を内部構造とするものと考えられる。この主体部付近で土地所有者の岡本一雄氏が須恵器を採集されている（図4-2、図版16-4）。高さ約11.5cmの直口の壺で、頸部と肩部に沈線文と刺突文を施し、胸部下半は回転ヘラケズリがなされるもので、山陰須恵器編年のIII期末～IV期の特徴を有するものと思われる。なお、この「やつおもて古墳群」の南側緩斜面において相当広範囲にわたって古瓦が出土していることから、古代の寺院跡（「重富廃寺」と仮称されている）が建立されていたものと考えられており<sup>(3)</sup>、この地域はきわめて重要な地域であったことが窺われる。

山ノ内14号墳の築造年代については、出土遺物がないため不明確であるが、犬立古墳、やつおもて9・10号墳の時期を参考に考慮すれば、概ね山陰須恵器編年III期末～IV期ごろにあたるものと推

測される。無袖の横穴式石室は石見山間部や、備後・安芸山間部に多く分布しており、今後この種の石室の系譜がいかなるものかについて総合的に考察すべきものと思われる。

このたび調査した山ノ内古墳群は、石見山間地域においては「やつおもて古墳群」に匹敵する有数の古墳群といえ、当地域の歴史を解明する上では重要な意味をもっているといえる。山間部の比較的小な水田可耕地の狭小な地域に30基以上もの古墳が集中して分布していることは、単に農業生産のみでは解決し得ない問題が含まれているのかもしれない。また、こうした後期群小古墳の被葬者は、生産労働にたずさわった集団成員を大幅に含むものとも解することもできようが、そうした問題については今後の研究に委ねるところが大きい。

（松本岩雄）

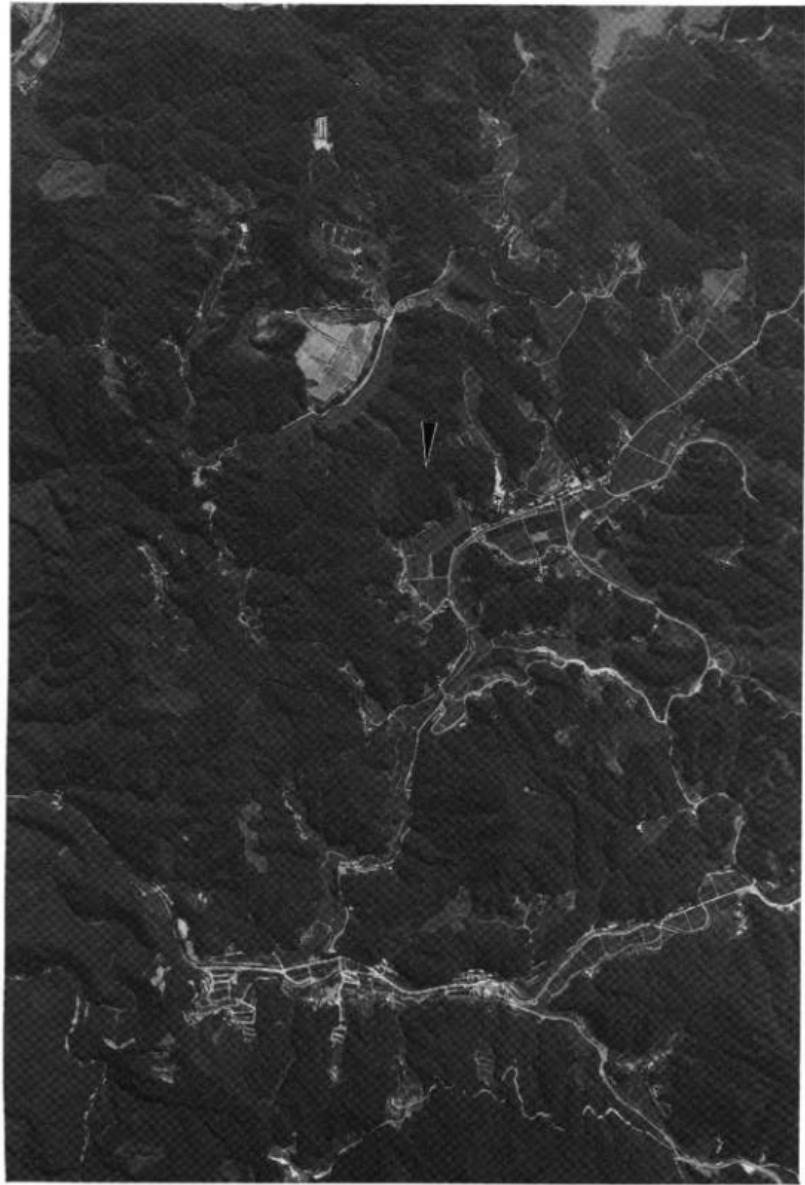
註 (1) 石材の同定は三浦清氏（島根大学教授）による。

(2) 旭町教育委員会『旭町誌』上巻 昭和52年

ト部吉博『中国横断道予定地内遺跡分調査報告書』島根県教育委員会 昭和57年

(3) 山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論文集』人文科学編 島根大学 昭和39年

(4) 旭町教育委員会『旭町誌』上巻 昭和52年

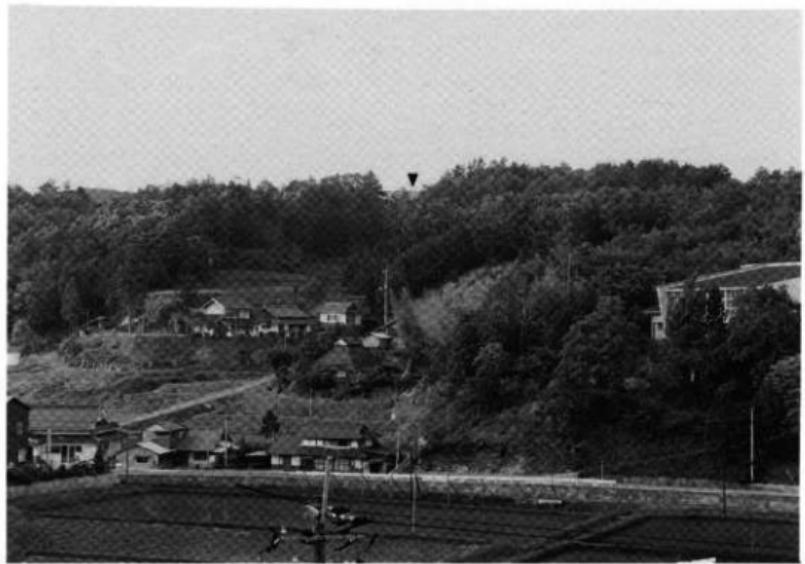


山ノ内14号墳及び周辺地形の鳥瞰

図版 2



1.山ノ内古墳群遠景



2.山ノ内14号墳の遠望



1.山ノ内14号墳調査前の状況



2.山ノ内14号墳盗掘坑の状況

図版4



1. 谷部に転落した石室石材（天井石と思われる）



2. 発掘調査風景



1.横穴式石室内の土層（南から）

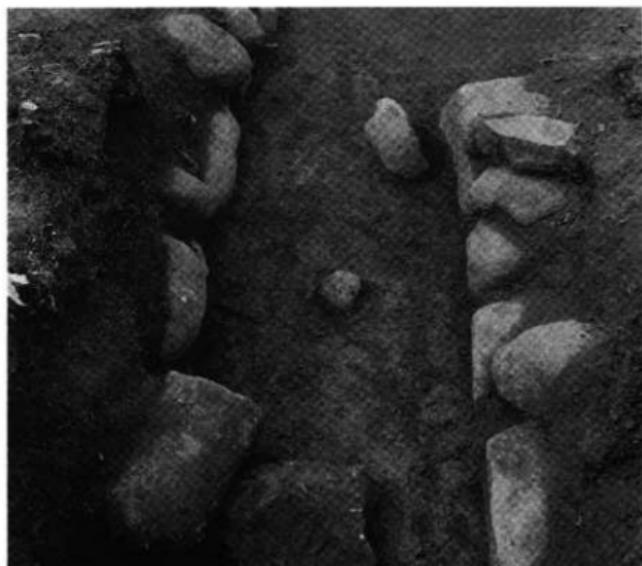


2.横穴式石室内の土層（東から）

図版6



1.横穴式石室内の奥壁・側壁転落状況（南から）



2.横穴式石室内の  
奥壁・側壁転落  
状況（北から）



1. 横穴式石室掘り形調査状況（南から）



2. 横穴式石室掘り形の土層（北から）

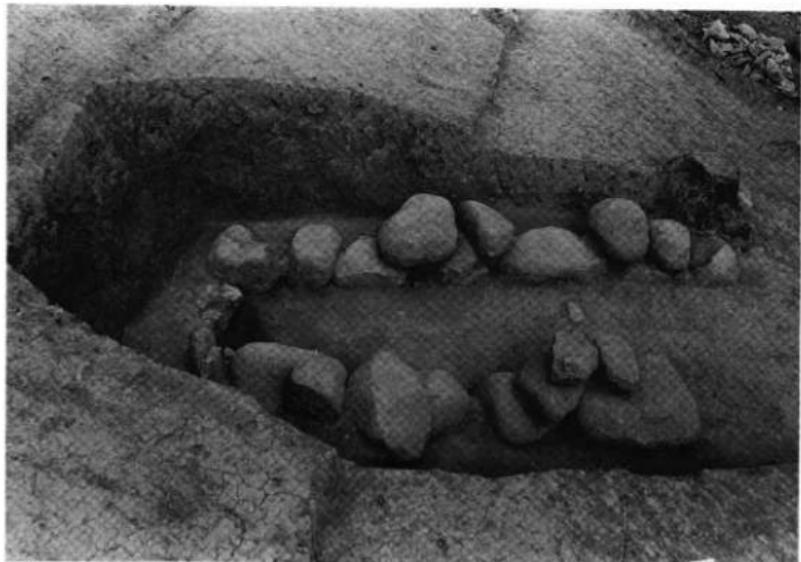
図版 8



1.横穴式石室掘り形の土層（南西から）



2.横穴式石室掘り形の土層（南西から）



1. 横穴式石室全景（西から）



2. 横穴式石室全景（東から）

図版10



1.西側の側壁残存状況



2.東側の側壁基底部の状況



1.横穴式石室全景（南から）



2.横穴式石室全景（北から）

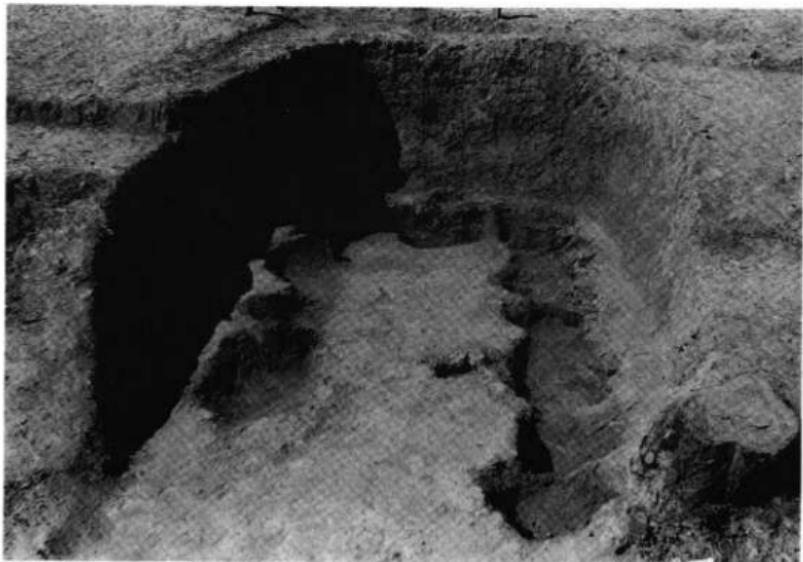
図版12



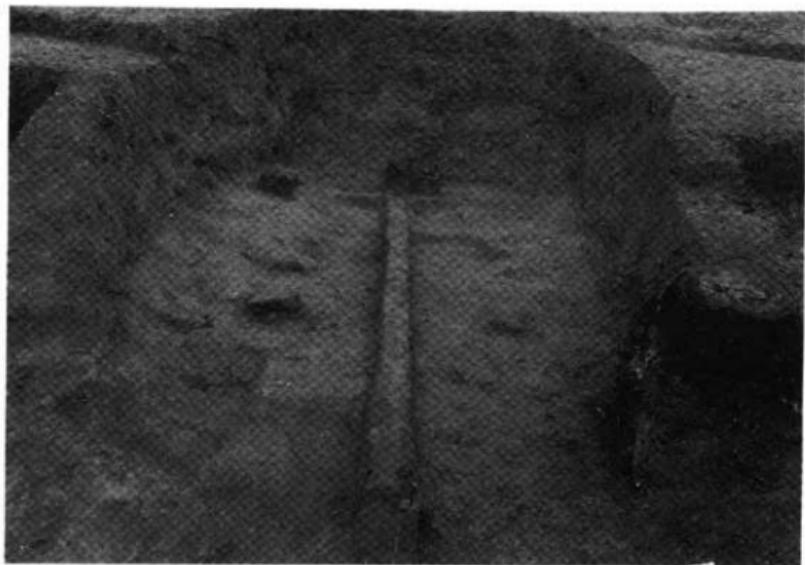
1.横穴式石室基底部の状況（西から）



2.横穴式石室基底部の状況（北から）



1.石室石材除去後の状況（南から）



2.横穴式石室掘り形全景（南から）

図版14



1.石室の西側に設置したトレンチ



2. 石室の東側に設置したトレンチ



1.山ノ内14号墳発掘前の状況



2.山ノ内14号墳発掘後の状況

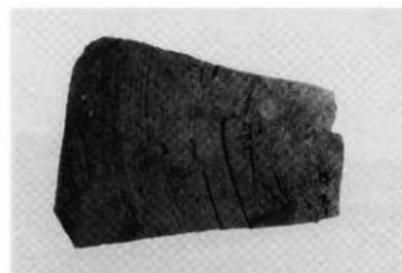
図版16



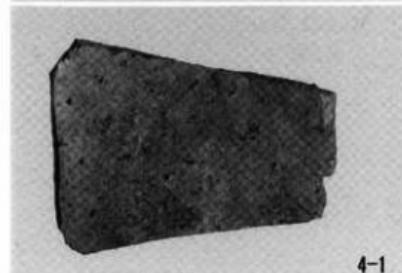
1. 山ノ内14号墳の石室奥壁石



2. 山ノ内14号墳の石室天井石



4-1



3. 犬立古墳採集須恵器



4-2

4. やつおもて10号墳採集須恵器

---

1989年3月27日 印刷  
1989年3月31日 発行

## 山ノ内14号墳発掘調査報告書

発行 旭町教育委員会  
島根県那賀郡旭町今市637

印刷 株式会社報光社  
平田市平田町993

---